

豊橋市美術博物館友の会だより

-2009年-春号 Vol. 71

FU風伯HAKU
Spring 2009



展覧会紹介

豊橋市美術博物館収蔵品展 「物語る絵画」

開催中～3月22日[日] 月曜休館 2階展示室1～5

今回の収蔵品展では〈絵画にみる物語〉〈語りかける絵画〉をテーマに、近世から現代にいたる多様な物語世界をめぐるります。実際に物語そのものを表した絵画や物語の挿絵原画だけでなく、観るものに語りかけるもの、物語的な拡がりを持つ幻想的な作品など、幅広い意味で〈もの・語る〉絵画を紹介しています。

●ボランティアガイドによる作品解説

火・木曜日を除く毎日 午後1時半～、2時半～

●美術講座

「東海道五十三対にみる物語」増山真一郎 2月28日(土)午後2時～

「絵画を読み解く～近代絵画を中心に」丸地加奈子 3月7日(土)午後2時～

おすすめ見所ポイント

【東海道五十三対にみる物語】

数ある東海道シリーズのなかでも、各宿の伝承や由来、故事などをあらわしたのとして知られています。二川宿本陣資料館の所蔵品より、近隣の宿場に由来する物語場面10点を選びました。

【神仏・英雄・美人にみる魅力的なキャラクター】

信仰の対象であった神仏をはじめ、神話や歴史の英雄、いわくありげな美人画まで、個性的なキャラクターを集めました。

【物語を舞う～祭礼と芸能】

脈々と受け継がれてきた神楽や能楽は、現代に生きつづけている物語そのものといっしょでしょう。大森運夫の黒川能、市川晃と浅田蘇泉の花祭りを紹介しています。

【河野通勢挿画「項羽と劉邦」】

長興善郎による戯曲に河野通勢が挿絵を添えています。1室を設け、物語の展開がわかるように展示しました。

【物語から「もの・語り」へ】

物語を現代的に解釈した絵画をはじめ、社会問題や戦争などに触発されて強いメッセージを発する作品も展示。作品に秘められた物語や作者の想いを読み取ってください。

【岩田浩昌の仕事】

豊橋出身で児童向けの漫画や教育図書などの挿絵を手がけた挿絵画家・岩田浩昌の資料を紹介しています。没後ご遺族より資料が一括して寄贈され、このたびの収蔵品展で初公開となります。



森田曠平「平野親様」昭和61年頃

同時開催 「ひなまつり」と「おひなさまと幸せのかたち展」

開催中～3月22日[日] 月曜休館 二川宿本陣資料館



内裏雛

五節句の一つ、上巳の節句は、古代中国で3月3日に水辺で邪気を祓う行事が伝わったもので、古くは厄払いの行事として行われて

いました。現在のように女兒の成長と初節句を祝う節句(ひなまつり)へと変わっていったのは、五節句が江戸幕府の公式な行事となってからです。江戸時代にひなまつりが一般庶民の間に深く浸透し、現在でも女の子の誕生を祝い、さまざまなおひな様が飾られています。

二川宿本陣資料館では上巳の節句(ひなまつり)にあわせ、二川宿の旧家に残る江戸時代末期のひな人形をはじめ、昭和30年代まで数多くみられた御殿飾り、豪華な七段飾りなどさまざまな雛飾りのほか、天神様や市松人

形、つるし飾りなどを江戸情緒あふれる本陣内に展示しています。

また資料館展示室では、「おひなさまと幸せのかたち展」を開催しています。本展では、子供の幸せを願うひな人形、江戸後期から明治にかけてのひなまつりが描かれた浮世絵、昭和初期のひな絵図、池上秀敏の紙雛図など、ひなまつりに関する資料のほか、学業成就を願う天神、福をもたらず七福神、商売繁盛の招き猫など、人々の願いが込められた縁起物もあわせて展示し、幸せを願うさまざまな形を紹介しています。お見逃しのないうようご来館ください。

イベント ● 琴の演奏会

3月8日[日]午後2時～

演奏/二川南小学校の和楽器クラブ



つるし飾り

豊橋市美術博物館の課題は何か、どこを目指すべきか

シリーズ3回目となる今回は、会員の皆さんにアンケートを実施し、ご意見やご要望を募りました。22通の回答があり、63%の方が総合的には満足されているという結果ですが、施設の面では改修や新築を望む声が多く聞かれます。編集部ではこのアンケートをもとに、名古屋を中心に活躍するアートディレクター鈴木敏春さん、美術博物館学芸員、友の会役員・編集部による座談会を開きました。その要旨をお伝えいたします。

鈴木敏春(すずきとしはる)氏プロフィール

NPO法人愛知アート・コレクティブ代表。名古屋市文化振興事業団運営委員、「ライフレビューアート」(回想法アート)や「ボーダレスアート」など、高齢者や福祉とアートを結びつけ「人間の持つ普遍的な表現の力」を紹介する試みを行っている。

アンケート結果

Q.美術博物館の企画展、常設展、教育・普及事業、イベント、収蔵資料、施設・設備、運営などにどのような感想をお持ちですか。

- ①とても満足している… 3 (13.6%)
- ②満足している…………… 11 (50.0%)
- ③普通…………… 7 (31.8%)
- ④満足していない…………… 1 (4.5%)

ご意見抜粋

- 絵本原画展や木喰展、上村三代展など今年度は充実したものが見られて良かった。二川の山下清展や五十三次展も良かった。
- 無料の常設展は良いと思う。企画展は少々物足りない。市民の多くの人達に美術博物館に足を運んでほしいので、個人コレクターの作品展示を募集してはどうか。
- 新美術館の計画が頓挫したことは残念なことであるが、その最大の原因が資金の問題であるとすれば、なぜ頓挫したのかの議論ばかりしていても進歩がないと思う。近いうちに計画の復活が望めるとは思えないので、今後10年くらいは現美術博物館を使うとして、そのために必要な改造、活用方法の議論がもっとあってもよい。
- ボランティアガイドがいるので詳しく解る。今後もバイオリン等の音楽とともに観覧できるようにしてほしい。
- 企画展のねらいが明確で、年間計画通り運営されている。まじめで実直な進め方に満足しています。



「木喰展」会場風景



上村三代展 二胡コンサート(撮影:新村猛)

- 市民展、各種作品展等、一般市民の発表の場として広く利用されている。企画展も楽しめた。目的の作品がない時でも寄ってみたいと思わせる「何か」、時間がある時気軽に立ち寄れる魅力がほしい。暗い!!と、落ち着いている!!とは異なると思うが、私はこの美術館を暗いと感じてしまうのですが…。
- 老壮若年者が一緒になって親子共々楽しく美術博物館を訪れ、共に学ぶ企画が必要。現在は大人もしくは愛好者中心であるのではないか。子供の頃より親しむ、中長期的取り組みが望ましい。
- 常設の2階が暗くあまり行く気がおこらない。昔に比べ、駐車場チケットが便利になり、いろんなところに努力を感じる。展示場での靴音が気になるのでじゅうたんには。監視をしている方が少しガイドして下さるといいと思う。
- 上村三代のたくさんの絵がこんな近くで見られるなんて夢のよう。そして演奏、すばらしい企画でした。
- 上村三代展のとき、二胡、一絃琴の演奏、淳之先生のお話はとてもよかった。吉田城、東海道宿場に関する常設がほしい。展示・収蔵スペースがもっとほしい。
- 常設展と収蔵に必要なスペースの確保、魅力ある施設であり続けるための設備の充実を希望。アートと博物に触れる事は人に活力を与え、思考回路に刺激となり、何より心に様々な感動を呼び起こすものであることを体験できる美術であってほしい。全ての世代を対象としつつ、子供たちと美術・博物との接点を増やし、一流の作品を鑑賞する喜びを積み重ねられるシステムを、豊橋市の文化・教育に関わる施策として構築していただきたい。

アンケートを読んで…

友の会： 展覧会や友の会事業などソフト面はおおむね満足していただいているようです。美術館とギャラリーの分離を希望する意見も聞きますが、現状において美術博物館が制作する人に発表の場を提供しているのはとても良いことだと思います。企画展と市民ギャラリーの時とは、会場の雰囲気もすっかり変わるので良いと思います。

国や県の大規模な美術館はもちろんうらやましいけれど、豊橋の規模としては、市民が生活の中に引き寄せ、身近に感じるにはちょうど良い規模ではないでしょうか。それが満足のお答えにつながったのでしょうか。

しかしハードの部分では、建物の老朽化、常設展示室が狭い暗い、講義室の不備が指摘されたほか、喫茶室の整備なども求められています。全体評価では満足でも、個別に意見を見ていくとハード面で満足と答えているものはありません。

学芸員： アンケート結果は、短期的なビジョンで改善できるようなところは今後対応をとる上で参考になりました。

また、いくつか厳しいご指摘もありました。「今後10年ぐらいいは美術館ができないだろうから、その中で何とかしろ」という意見です。必要な改造、あるいは活用方法の議論がもっとあるべきじゃないかと。これは議論すべきだと思います。それから、「お年寄りも若い人も、親子ともども楽しく学べたり、遊べたりする美術館であってほしい」という意見ですね。共に学ぶ企画が必要と。これについては、キッズガイドの作成やワークショップの開催など、少しずつ取り組んでいます。



座談会

豊橋市民と美術館

学芸員： 昨秋の上村三代展は盛況で良い展覧会だったという声も多いのですが、人気の企画展を行えば当然観客の動員数は多くなります。

低迷という話がありますが、この30年間豊橋市美術館の入館者数は増え続けています。

豊橋は、日本画も洋画も優れた画家が多く出ている街で、当館はその作品をコレクションし、それが館の性格、あるいは特徴となっています。テーマや展示、普及事業を工夫して、市民に興味をもって足を運んでもらえるような企画を打ち出していきたい

と思っています。今開催中の収蔵品展では、「物語る絵画」をテーマに作品を約100点を選定し、初めての試みとして、展示室で絵画に関連した落語を上演します。

ミュージアムショップや休憩コーナー、体験コーナーのような部分を充実して、家族で滞在を楽しんでもらえるようなスペースをもう少し充実できればという希望も持っています。また、若い方に来ていただくとなると、ランニングコストの問題もありますが、夜間開館など仕事が終わった後でも来られるような運営が必要だと思います。

友の会： 友の会も、展覧会にあわせてイベントを考えています。昨年上村松園の絵の前で行った箏演奏は大好評でした。かつては規制が多くてできなかったことが、近年次第に緩やかになりできるようになりました。これからもどんどんユニークなことを考えたいと思います。

美術教育の問題も大変重要です。人づくりの土台の上に、生きる力をとということで、伝統文化を次の世代にどう植えつけていくか。それが魂の問題になります。造形パラダイスもそうですが、子どもの作品が出ると親も子どもたくさん出かけてくる。だから、例えば各学校から募集した作品の優秀なものを飾る部屋を、小学校から大学まで、できれば豊橋まつりのときに行うというのはどうでしょう。子ども未来館とリンクして企画するのもおもしろそうですね。

美術博物館はどのような方向を目指すべきか

1) ハード面ではまず収蔵庫を！

学芸員： 新館の建設を決して諦めたわけではありませんが、現状では困難でしょうから、必要な改造と活用方法についての議論も行っていくべきだと思います。

収蔵作品についても、購入費は少なくなっていますが、最近は寄附が多くなってきています。戦後活動した作家たちやそのご遺族から、作品を整理したいという要望がかなり出てきています。以前には星野真吾さんや平川敏夫さん、今年度は大森運夫さんの作品をまとめて寄贈していただいているという経緯があります。スペースが充分であれば必要な資料をすべて収蔵することもできますが、スペースが無いという理由で重要な資料をみすみす逃すということも起こりかねません。できるだけ広い収蔵スペースが必要ということは、本当に差し迫った重大な問題です。

2) 常設展の充実

学芸員： アンケートでは「常設展と収蔵に必要なスペースを確保する」というご意見がありました。常設展のスペースが絶対的に狭すぎる、つまり、中身が欲張って多すぎるわりにキャパシティが狭いという問題です。全部を紹介するのであれば施設を拡充するということだと思いますが、少なくとも現状では困難なわけですから、見せ方を工夫することが必要になってくると思います。例えば、会期を区切ってジャン

「豊橋市美術博物館の現実と課題」 その3

ルごとにまとめて展示するなど、思い切った手段も考えなければなりません。美術なら、郷土ゆかりの画家を中心とする1100点あまりの収蔵品の中から、岸田劉生の《高須光治君之肖像》をはじめとするリアリズムの系譜に焦点を絞って紹介するというのもその一案です。

3) 現代美術との関わり

学芸員：豊橋市では、故・星野眞吾さんの寄附を発端として、新しい日本画を発掘・顕彰する全国公募展「トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展」を実施しています。日本画の定義や解釈は出品者に委ねているので、これが日本画？というような作品も含めて全国から応募があり、若手作家の登竜門としても注目されています。昨秋第4回を開催し、展覧会が定着充実している手ごたえを感じました。入賞作品は市が買上げ、美術博物館に収蔵しています。

美術館運営も、豊橋という街の風土やそこに暮らす人々の嗜好とも関連して、冒険もできず安全な方向へ行ってしまう傾向があるように思います。今後もっと、現在活躍しているこの地域の作家を取り上げて、展示スペースを提供するなど、チャンスを与えることも美術館の重要な使命だと考えています。

4) 子どもたちとアート

友の会：どうしたら若い人たちや子どもたちに美術博物館にきてもらえるだろうか。美術博物館でも友の会でも常に議論されていることです。情操教育の必要性が叫ばれ、心とか感性の大事さが見直されようとしているとき、今の学校教育の中に美術がほとんど無くなって、専任の先生も少なく、移動時間を惜しんで普通教室で美術の授業を行い、美術教室も物置になってしまったり、美術クラブもなくなってしまったという状況も聞いています。

学芸員：豊橋では、「いきいきパスポート」を配布して、土・日・祝は児童生徒は無料で美術博物館へ入館できるようになっています。教育委員会や校長会へもたびたび働きかけるのですが、館の中に子どもの姿はほとんどありません。

しかし、秋の豊橋まつりの「造形パラダイス」では、たくさんの親子連れの熱気に驚かされます。美術博物館にも大勢立ち寄られるので、この折に美術や歴史に親しんでいただくようなイベントや企画ができるとよいと思います。



ワークショップの会場風景

去年、講義室の壁面の張替が決まっていたので、「絵本原画展」のワークショップでスズキコージさんを講師に招き、子どもたちに落書きをしてもらいました。テレビにも取り上げられましたが、子供だけでなく親たちも喜んで一緒に落書きをして大盛況でした。

友の会：「造形パラダイス」は戦後まもなく始まり、今日まで続いているすばらしい活動で、市外や外国の方からも高く評価されています。初めの頃はみんなで竹や木を集め、土をこねて焼き、ブロックを組み立てて大きなオブジェを造り上げたりしましたが、今は大掛かりなことができないようです。テーマを決めて割り当てて、作り方を指導し、ペットボトルや不織布をマーカーなどで塗って、簡単に仕上げたものを集めて飾るという傾向にあるような感じがします。確かに単純なものが集まっただけでもインパクトはありますが、造パラがこれだけ根付いている街ですから、学校への負担がこれ以上無理ならば、かつて自分の作品を飾った大人たちが、子どもの頃の熱い思いを掘り起こして市民全体がアーティストになるようなことを考えられないのでしょうか。

鈴木敏春：ペットボトルや不織布という素材は逆に、そういう素材が現代を反映していると思うので僕は面白いと思います。

当時の子どもの作品には、ほんとにいいものがあつたはずなのに、記憶の片隅に残っているだけで実際には作品や資料がないんです。そういうところの保存を徹底してこなかったなというのが、感じとしてありますね。

アートパラダイス、豊橋がやっている造形パラダイスにしても、それぞれのテーマや中身を吟味したほうが、だいたいいいものももっと出てくると思います。それと、組織のあり方ですね。それをちょっと見直すとか。

あるいは、造パラで育った大人たちの世代がアートNPOを作って、街中で展示会を開くとか、形をどんどん変えていって、最終的に美術館へたどりつくようにしたほうが盛り上がるんじゃないかと思います。

アメリカの戦前にあったニューディール政策で、一番メインに、積極的にやったのは芸術活動の奨励でした。その結果、アメリカはあれだけ現代美術がさかんで、世界的にすごいシェアを誇っているというのは、それだけ芸術に対して投資をしたということです。ただの失業対策だけではなくて、失業対策プラス人々に夢や希望を与えるのがアートの役割だから、そういうところに投資をすべきだと。厳しい時代だからこそ逆に、芸術に投資して活性化を図るということ。そういう活動はさらに有効な手段になり得ると思います。

芸術が、生きていく上で自分の心にどんなに大切なものか、いまさらながら思い当たります。魂が震えるような作品の展示だけでなく、「心が豊かになる芸術との出会い」を作り出し、人生の早くから触れてもらえるよう情報を発信するのも美術館の役目だと思います。「友の会」がどんな活動をすれば思いが叶うのか、次号をご期待下さい。(風伯編集部)

友から友へ Members to Members

上村松園・松篁・淳之展と箏コンサート

伊藤和男(548)



美術博物館開館30年の節目の年に、「上村松園・松篁・淳之展」という日本画の代表的画家の作品を一堂に観覧できる展覧会が開催され、中でも上村松園は一度は見たいと思っていたので、楽しみに出掛けました。

3人の画家の中では、やはり松園の美人画にどうしても目が行ってしまい、特に好きなのが

〈夕暮〉という絵です。これは以前から松園の中でも好きな絵で、やはり本物は予想以上に大きく素晴らしかった。夕暮れ時の御針で、障子を開けて針に糸を通す仕草の、「これぞ日本の情景だ」ともいべき作品。時代的には江戸末期から明治初期のころのイメージですが、日本女性の庶民的な美しさににじみ出ていて好きな絵です。その他にも素晴らしい作品が多く、久しぶりに日本情緒と美人画の世界に浸ることができ

ました。松篁、淳之もそれぞれ独自の画風で、偉大な母の存在に対抗するかのごとく別の味わいがありました。反面、息子、孫の描く美人画も見てみたい気がしました。

展覧会終盤に入って、友の会主催の「林美也子 箏コンサート」に出掛けました。特別に松園の作品展示室を会場とした箏演奏は、何ともいえない「雅」で贅沢な時間であり、会場の皆さんも満喫されたと思います。

私は生の箏演奏を聴くのは初めてで、ましてや一流の演奏家による一流の音色は見事なものでした。箏にはいろいろな種類があるということも初めて知り、13絃、17絃、12絃の八雲琴、そして絃が1本の一絃琴など、それぞれの箏による演奏も十分に堪能しました。奏者の林美也子氏が豊橋出身ということもあり、やさしいトークを交えた演奏には感動と共に親しみも感じ、印象的な夜となりました。

次回もぜひ新鮮な企画を期待しております。また企画展に西洋絵画(宗教絵画など)をもう少し取り入れてもらいたいと思っております。予算の都合もあるかと思いますが、他の美術館と連携して頂き、他の都市からも多く来てもらえるような企画をお願いします。

「秋の夕べ 林美也子箏コンサート」に寄せて

河邊満江(699)

友の会の催しは、いつも開催中の展覧会にちなんだ楽しいものである。今回の箏コンサートも同様、「上村松園・松篁・淳之展-いのちの煌き、美人画と花鳥画」開催中の11月8日の夕べ、ぜひたくにも松園の香り高い、美しい絵の飾られた一室で催された。

奏者の林美也子さんは、単に琴の名手であるというだけではなく、その音楽性は技巧にのみ走らず、深い人間性に裏打ちされた一途な、純粹に煌くものがある。以前から敬愛しているファンの一人としては、当日が非常に待ち遠しいものであった。この企画が時宜を得た素晴らしいものであると予想はしていたが、期待に違わず、存分に満足のゆくものであった。

箏、一絃琴、八雲琴と、それぞれの楽器の特性を生かして掻き鳴らされる音は、月の光の冴えざえとした輝き、すだく虫の音、吹き渡る風の音……まるで深まる秋の自然に呼応するかのように鳴り響いた。張り詰めた一音一音には、松園の魂が乗り移ったかのような幽艶なものさ感じられたのである。

かつて松園が〈序の舞〉を描き、宮尾登美子が「序の舞」「一絃の琴」を書き、そして今宵こうして松園の絵の前で一絃の琴が演奏されるという不思議な巡り合わせに、深い感動を覚えるとともに心地良い幸せな気分浸った。10月に小坂井町のフロイデンホールで林美也子さんの演奏を聴き、感激も

覚めやらぬうちにまたしてもこのような機会に恵まれるというのは嬉しいことである。

帰ってから昔読んだ宮尾登美子の「一絃の琴」を再び読み返しているうちに、琴の音がピンピンと耳に響いてきて、しばらくは琴の虜になってしまい、松園の絵が目の前にちらついたりして、後にまで随分と楽しませてもらった演奏会であった。

月明や 一絃の琴 響きたる



一絃琴を奏でる林美也子さん

◆土曜美術サロン

〈友の会会員限定〉

美術のおもしろさを深める
ための、3回連続講座

美の翼を思いっきり広げたいあなたに贈る、新しい視点で語る金原館長のメッセージ&トークです。

講師：豊橋市美術博物館長 金原宏行 氏

定員：20名(先着)

受講料：1・2回目は無料、3回目のみ350円(抹茶代)

申込方法：3/3(火) 9:00より電話受付(51-2882)

1講座だけの受講も可能です。

第1回 3月14日(土) 午後2時～3時
(会場：美術博物館 講義室)

「なぜ人はものを集めるのか」

個人コレクターに加え、企業による美術品の収集が増えていきます。新しいパトロン像を探ります。

第2回 3月28日(土) 午後2時～3時
(会場：美術博物館 講義室)

「ニセモノ・ホンモノの世界」

ニセモノ(贋作)がつきものの世界にあって、いかにそれらを見分けるか。実例によって考えます。

第3回 4月11日(土) 午後2時～3時
(会場：三の丸会館)

「美術館は人が創り、人を創る」

どうする美博、どうなる美博。開館30周年を迎える豊橋市美術博物館の将来像を語ります。

21年度の会員更新手続きをお願いします

3月3日(火)より始めます。下記のいずれかの方法により会費をお支払いください。

○美術博物館窓口
直接会費をお支払いください。

○郵便局
同封の払込票にてお支払いください。
(手数料無料)

○銀行
下記口座へお振込みください。
(手数料有料)
三菱東京UFJ銀行 豊橋支店
普通 4806768
豊橋市美術博物館友の会

正会員	3,000円
家族会員	2,000円
特別会員(個人)	10,000円
賛助会員(法人)	20,000円
風伯会員(市内70歳以上)	1,200円
高校生会員	1,500円



21年度会員証

春の研修旅行のお知らせ

(金沢21世紀美術館ほか)

4月1日(水) 9:00より申込みを受付けます。詳細は同封のチラシをご覧ください。

『風伯』バックナンバーを配布しています



友の会活動PRのため、創刊から19年度までの『風伯』残部を配布しています。館内のポスター掲示コーナー脇に設置してありますので、ご希望の方はご来館の際ご自由にお持ちください。

21年度のおもな展覧会スケジュール

美術博物館

開館30周年記念展「ターナーから印象派へ」	7月3日(金)～8月16日(日)
高松市美術館所蔵「だまされた眼～トリック・アートの世界」展	8月22日(土)～9月23日(水)
開館30周年記念 三遠南信交流展「ミュージアム・サミット 美の競演」	10月10日(土)～11月15日(日)
愛知県美術館所蔵品展	2月20日(土)～3月28日(日)

二川宿本陣資料館

六十余州名所図会展 - 広重の描いた諸国の名所 -	4月25日(土)～6月7日(日)
鉄道開通 - 列車に乗って東へ西へ -	7月18日(土)～8月30日(日)
装身具の美 - 伊籠・根付・煙草入れにみる江戸の装い -	10月10日(土)～11月15日(日)
信仰の街道「秋葉道」展	2月13日(土)～3月22日(月・祝)

収蔵品紹介

〔東海道五十三対 二川〕

歌川広重 ● UTAGAWA, Hiroshige

天保14年-弘化4年(1843-47) 37.0cm×25.3cm 大判摺絵
豊橋市二川宿本陣資料館蔵

東海道の宿場を描いた浮世絵としてすぐに想起されるのは、天保4年(1833)頃出版された歌川広重画「保永堂版東海道」であろう。変化に富んだ各地の風土や気象を旅の情景の中に織り込んだこの作品により、広重は人気絵師となる。その後も色調や画面の縦横を変えたり、各宿場を詠んだ狂歌を加えたり、あるいは宿場の風景と人物を組み合わせてたり、と工夫を加えながら広重は数多くの東海道五十三次ものを世に送った。

この「東海道五十三対」シリーズも各宿場を題材とした続き物であるが、一見してわかるように風景画ではない。絵は広重だけでなく、役者絵や武者絵など人物が得意な三代豊国、国芳を加え、三人が分担して描いている。本シリーズには「保永堂版」にみられるような叙情性や象徴性を伴った「物語性」はない。それよりも、先行する「名所図会」のビジュアル版といった趣で、実際に「東海道名所図会」(秋里庵編)からの引用も多く、各地の地誌的な情報を説明することが主眼のようである。上部の小窓では各宿場に関する和歌や狂歌、寺社などの名所の縁起や名物、歴史や伝説などを記し、下部でその場面が可視化される。それらは読み物や芝居で有名な合戦や敵討ちの英雄譚であり、土地に伝わる怪物や幽霊の出てくる奇譚であり、また知っていると少し自慢のできる実用的な地元情報であり、それらは各宿場と結び付けられた、より具体的な「物語」なのである。

日本橋と京を含む55箇所すべての場所で人々を惹きつける「物語」を探すのは難しいことであったのか、少し強引な設定もまま見られる。本図の画題は「東海道中膝栗毛」(十返舎



一九著)から引用したもの。しかし、残念ながらその「物語」は二川宿のものではない。取り込み忘れて洗濯物を幽霊と見間違えるという話は本来浜松宿の旅籠屋での出来事。上部に描かれた「膝栗毛」を読む女性の「いまよんでいるところはふた川だがね、これより前(浜松宿)の干物をみてううれいだとおもつてこわがる場所がおかしかつたよ」という台詞により二川宿の画題とする正当性を保とうとするが、何とも苦しい言い訳である。

(豊橋市美術博物館学芸員 増山真一郎)

上記の作品は収蔵品展「物語る絵画」にて展示中です(3/22画まで)

編集後記

2009年も厳しい年になりそうです。心理的不況にならないためにも、アートを通して心への栄養を蓄える必要があると思います。

「豊橋市美術博物館の現実と課題」もシリーズ3回目となり、1月17日にはアートディレクターの鈴木敏春氏をお迎えし、とても参考になるお話を伺う事ができました。豊橋は星野真吾、中村正義をはじめ多くの著名な日本画家を輩出しました。そのことを生かし「日本画を見るなら豊橋へ」と言われるような特化した美術館というのいいのではないのでしょうか。

豊橋市の木はクスノキ、花はツツジです。ところが、市をイメージした色はありません。路面電車でゆられ、自然豊かな美術博物館へお誘いするようなカラーを作れないのかと、ふと思いました。(山崎恵子)

【表紙作品】

斎藤真一「梅雨の頃」

昭和46年(1971) 130.3cm×97.0cm 麻布・油彩

豊橋市美術博物館収蔵品展「物語る絵画」より

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第71号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 原文成

担当副会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 山崎恵子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成21年2月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)

平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円

※会員は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。